

## シンハラ語と日本語の対照研究 — 文学翻訳における言語構造分析を通して —

<sup>1</sup> Y Nishina

<sup>2</sup> J E Mohotti

<sup>1</sup>Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University, Japan

<sup>2</sup>Department of Languages, Sabaragamuwa University of Sri Lanka

januka@ssl.sab.ac.lk

### Article Info

#### Article history:

Received :30.08.2022

Accepted :20.12.2022

Available Online

#### キーワード:

翻訳  
シンハラ語  
日本語  
文学  
対照言語学

*Sinhala  
Japanese  
Literature  
Contrastive Linguistics*

### ABSTRACT

本研究は、シンハラ語母語話者が、日本語への文学翻訳を通して産出した日本語を分析し、母語の影響や類似表現の比較などを通して両言語の相違を示すことで、翻訳上の問題の克服に寄与することを目指す。その際、シンハラ語原文の構造分析を行い、両言語の間に存在する言語類型論的な異なりや、文法上の特徴、語彙の多義性などを、また、談話分析の観点から使用文脈を検討し、対照言語学的観点から記述した。それにより、母語話者の協働による翻訳作業を通して浮き彫りにされた翻訳上の問題、すなわち、非母語話者の産出する目標言語の不自然さについての説明を施すことが可能となった。

This research is based on Japanese translations of six Sri Lankan folktales, translated from Sinhala into Japanese by a Sinhala native speaker. This paper focuses on how to overcome the mistranslations that occurred due to first-language interference in translating literature, with special reference to the linguistic structure of both, Japanese and Sinhala. To accomplish the above purpose, structural and discourse analysis of Sinhala source text, special characteristics of Sinhala grammar, and polysemy of Sinhala vocabulary were examined from the perspective of contrastive linguistics. The unnaturalness of the target language produced by a non-native speaker and the reasons behind that unnaturalness were disclosed in the findings.



## 1. はじめに

シンハラ語から日本語への翻訳についての包括的な研究はわずかしかない。これまでのシンハラ語の文学作品の翻訳を概観すると、シンハラ語母語話者（以下、シンハラ人）によるもの、日本語母語話者（以下、日本人）によるもの、また、シンハラ人と

日本人が共同で翻訳したものも見られる。筆者が確認できた限りでは、日本人が独自に翻訳したシンハラ文学はすべて野口忠司氏によるもので、Viragəyə (1956) が『蓮の道』(2002)、Gamperaliyə (1944) が『変わりゆく村』(2010)、Kaliyugəyə (1949) が『変革の時代』(1974)、Yugaantəyə (1957) が『時の終焉』(2012)、Maləgiyə ætto (1959) が『亡き人』(1993)、Madol duuwə (1947) が『泥んこの島』(2004) というタイトルでそれぞれ公刊されている。シンハラ人と日本人の共同翻訳では、中村礼子とウィターナゲスーシーにより Wadəbaginnə (1991) が『「熱い紅茶」』(1995年)、中村礼子とパドマラタナーヤカにより Heṭə Echchərə kaluwərə nə (1975) が『明日はそんなに暗くない』(1991年) というタイトルで発表された。シンハラ人により日本語に翻訳されたシンハラ文学の例は確認できなかった。以上がシンハラ語文学の翻訳の現状であるが、本研究に先行する翻訳作業においては、シンハラ人の翻訳に対してなされた日本人の修正提案を検討することで、翻訳の協働の可能性も示されることとなった。

本研究は、文学翻訳の一形式として行われた再話による翻訳を扱う。筆者の一人であるエディリマーンナモホッティ・ジャヌーカが Sri Lankan Folktales 「スリランカの昔話」を翻訳した際に産出された日本語を研究対象としたものである。翻訳方法は、シンハラ語を母語とする翻訳者が口頭により日本語で再話して二人の日本人がそれを文字化していくというやり方であった。日本人は趣味でシンハラ語を学習しており、シンハラ語の原語の意味をそのまま理解したいという希望だった。そのため、翻訳者が口述する日本語自体をそれほど吟味することなくそのまま文字化していた。それに気づかなかった翻訳者は、日本人が文字化してくれた文章を完成版と誤解してそのまま出版してしまったために、それを読んだ他の日本人からは、文法的な間違いではないのに日本語が不自然だという感想が寄せられた。それをきっかけに本稿の構想が生まれ、上記の二人の日本人から後日提供された翻訳の修正をもとに検討を始めた。

翻訳原文に修正を施した日本語話者は、母語話者の直観によって自然な日本語に書き換えたのであったが、非母語話者にとっては、なぜそのほうが良いのか、その理由は何かについては不明のままであった。本研究は、産出された日本語の不自然さの原因を解明し、そこにある程度の一般化された説明を施すことを目的とする。研究課題としては、抽出した翻訳例について、対照言語学的観点からの記述を試みることにする。

## 2. 先行研究と残された課題

シンハラ語と日本語の翻訳についての先行研究には次のものがある。まず、Rathnayake(2015)は、シンハラ人日本語学習者による翻訳テキストの誤用分析を行っているものの、その研究で焦点が当てられていたのはビジネス場面や観光業界でのテキストのみである。

Weerasiri(2013)、Dayarathne (2015)、Dayarathne (2016)、Amarasinghe (2021)は、文学作品の翻訳を中心に研究を行っている。しかし、そこで問題になっているのは、文学作品に出現する文化的表現の翻訳における困難さである。言語表現自体に注目した研究、なかでも、シンハラ人により日本語に訳されたシンハラ文学作品が日本人の読者にどの程度自然に受容されているかについて検討した研究は管見の限り見当た

ない。翻訳が不自然であるとしたら、それはどのような原因によるものか、翻訳者の母語が翻訳時にどの程度影響しているのかについて、明らかにする必要がある。本研究は、シンハラ人の筆者自身によって翻訳された「スリランカの昔話」をもとにして、両言語の構造分析及び類似表現の比較を行うことによって、両者に横たわる相違点を明らかにした。

### 3. 調査概要・研究方法

翻訳した日本語が不自然であると日本語母語話者から指摘を受け、修正案の提供があった部分を抽出し、両言語の構造の違いを示すために、シンハラ語の原文の分析を行った。その際、形態素のセグメントとグロスについては、Lehmann (2004) および Chandralal (2010) を参照した。例文は上からシンハラ語原文、次にローマ字化して拘束形態素をハイフンで示し、その直下にグロス (IMG:interlinear morpheme glossing) を施した。日本語訳は、翻訳原文と日本語母語話者による修正訳を並べた。

### 4. 分析と結果

母語話者から修正の提供を受けたうちの8例を挙げ、それぞれの分析結果を以下に述べる。

- |     |                      |                  |               |     |
|-----|----------------------|------------------|---------------|-----|
| (1) | ලියන්ටන්             | බැ               | කියවන්ටන්     | බැ  |
|     | liya-n̥ta-t          | bææ              | kiyəwa-n̥ta-t | bææ |
|     | write-INF-too        | POT <sup>1</sup> | read-INF-too  | POT |
|     | 翻訳原文：読むことも書くこともできない。 |                  |               |     |
|     | 修正文：読み書きができない。       |                  |               |     |

この翻訳原文はシンハラ語の原文（直訳：「書くこともできない読むこともできない」）とほぼ同じ構造を持ち、誤訳であるわけではない。が、修正文のほうが適切である理由は、可能表現のもつ二義性による。可能には大別して能力可能と状況可能があり、前者は、読んだり書いたりする能力に欠けること、ここでは文盲という、人の属性を意味する。後者は本来読み書きをする識字能力があっても、それができない状況下にあること、たとえば眼鏡を忘れてきてしまったとか、ペンがないとかいう場合である。シンハラ語の原文も翻訳原文もどちらもその両者の解釈を可能にする。しかしこの物語において、アパラは「学校に通ったことがなく」、それに対して「奥さんは頭がいい人」であり「書くこともよむこともできる」と対比されているので、ここでの意味は明らかに、能力可能の「できない」である。その意味だけを表すのが修正文の表現である。無学であり非識字であることを「読み書きができない」と表現することで、可能の内包する二義性を解消する表現となった。

- |     |               |     |       |       |
|-----|---------------|-----|-------|-------|
| (2) | හාමුදුරුවන්ගේ | වචන | අබරාට | ඇහුණා |
|-----|---------------|-----|-------|-------|

<sup>1</sup> Bææ は意味としては不可能を表すが、可能のモダリティの形態素としてグロスをつけている。

haamuduruwan-ge	wachənə	abəra-tə	æhuna
monk-GEN	words	abara-DAT	hear.PST
翻訳原文：それが聞こえたアバラーさんが、			
修正文：それを聞いたアバラーさんが、			

この誤訳ではない翻訳原文が修正文に代えられた要因は複数ある。まず、シンハラ語は、動作に意志を伴うかそうでないかの区別を顕著に言語化し、動作主のとり格や非意図を表す形態素で区別する（Chandralal 2010:124, Gair&Paolillo 1997:31f）。知覚動詞の場合も非意図同様のふるまいをする。それは日本語でも区別していることである。

(a) アバラーがそれを聴く。

abəra	ekə	ahanəwa
abara	that	listen.NPST

(b) アバラーにそれが聞こえる。

abəra-tə	ekə	æhenəwa
abara-DAT	that	listen.INVOL.NPST <sup>2</sup>

日本語では漢字でも書き分けているように、(a)は動作主が意志を持って行う積極的な認知的行為であり、動作主アバラーが主格ガ、動作の対象が対格ヲで標示されている。それに対して(b)では、意味役割としては経験者（知覚者）としてのアバラーが与格二、刺激物（音源）が主格ガで標示されている。このような格配分は、シンハラ語も同様である。上記の例で、(b)の経験者 abəra につく接辞-tə は与格標示である。日本語では動詞が異なるように、シンハラ語の æhenəwa は(a)の動詞 ahanəwa の非意図形<sup>3</sup>である。

では、なぜ日本語では、本来の(b)の状況を(a)のように表現したのか。第一に、このフレーズは連体節の中で従属しており背景化されている。主節よりも前の時間軸で、アバラーに知覚の認識があったというほどの情報しかない。よって、非意図的な知覚であっても(a)の表現は中立的に機能する。第二に、以下のような理由が考えられる。

(c) それが聞こえたアバラーさんが、奥さんが教えてくれたようにそれをそのまま繰り返しました。

(d) それを聞いたアバラーさんが、奥さんが教えてくれたようにそれをそのまま繰り返しました。

<sup>2</sup> æhenəwa のグロス を hear. PST とすることもできるが、ここでは二つの独立した語彙的対立というより、ahanəwa の形態論的対立である非意図形として提示している。

<sup>3</sup> Chandralal (2010) では動詞の受身形 passive form と分類しており、Gair & Paolillo (1997) は非意図形態素 involitive morpheme を含む派生形であるとしている。

(c)の翻訳原文をみると、連体節の中では連体節にする前の元の文で与格であったアバラーさんが、主節の「繰り返す」という述語動詞の主語に合わせるため主格になっている。すなわち、関係節の主要名詞の格が関係節中における空所 (gap) の格と一致しない。(d)であれば、アバラーさんの格は連体節でも主節でも主格で、「聞く」と「繰り返す」の主語となる。(d)のような主格関係節の方が、(c)のような斜格関係節よりも認知的負荷が低く処理がしやすいことがわかっている<sup>4</sup>。  
ところでシンハラ語の原文は、この部分が三つの文に分けられている(e)。

- (e) haamuduruwan-ge wachəṇə                      abəra-ṭə                      æhuna.  
monk-GEN                      words                      abara-DAT                      hear.PST  
お坊さんの言葉がアバラーさんに聞こえました。  
haaminee-ge                      awəwaadəya-t                      matak                      wuna.  
Wife-GEN                      advice-too                      remember                      become.PST  
奥さんのアドバイスも思い出しました。
- abəra-t                      æhuwa                      kauda                      otəṇə                      kiyəla.  
Abara-too                      ask.PST                      who                      there                      that  
アバラーさんも、「そこに誰がいるの？」と尋ねました。

このような三つの文を再話の際に(d)のように連体節や副詞節を組み合わせて一つの複文にするのでなければ、日本語でもシンハラ語同様に(b)のように翻訳して自然であろう。つまり翻訳者は、当該の語彙だけに注目するのではなく、文全体、もしくは談話構造まで視野に入れつつ翻訳すべきであることがわかる。

- (3) දුචන්ත                      පටන්ගන්නා  
duwa-nṇa                      paṭangatta  
run-INF                      start.PST  
翻訳原文：走り始めた。  
修正文：走り出した。

翻訳原文と修正文では、シンハラ語原文と同様に二つの動詞から成り、どちらも V1+V2 という複合動詞が用いられている。V2 によって V1 の動作や行為が開始することを表す統語的複合動詞 (影山 1993) であるが、常に言い換え可能というわけではない。

V2「～出す」は、動作や行為が不意に開始するという意味合いを持ち、「突然」「急に」「とうとう」などの副詞と共に使われることも多い。翻訳文では、アバラーが腰を強く打たれて、「わけが分からなくなってしまい、叫びながら向きを変えて必死に」行なった行為であるので、「走り出す」のほうが描写に臨場感が出る。「走り始める」ではむしろ鷹揚とした印象さえ与えかねない。なお、「～出す」は意志を表す表現には使いにくい (例「\*食べ出そう<sup>5</sup>」)。ゆえに、動作主の制御がある命令や意向を示す表現には使うことができず、「～始める」のほうが適している (例「どう

<sup>4</sup> Ford 1983, Ueno & Garnsey 2008 など。

<sup>5</sup> \* は、非文を表し、文法的に不可能な例である。

ぞ食べ始めてください」vs.「\*どうぞ食べ出してください」）。このことは、「～出す」が、人の制御できない天候などの自然現象（「雨が降り出す」）や、生理・心理現象（「泣き出す」）によく使われることにも関連する。

このように、文文化された補助動詞の類義性、つまり文法機能上の類似においても、その僅かな違いを把握し、より適切な選択肢を採用すべきである。

- (4)    ආයේ   නම්       යන්නේ       නෑ  
          aayee   nam     ya-nnee       nææ  
          again   EM     go-FOC       no  
          翻訳原文：また一生行きません。  
          修正文    ：もう一生行きません。

「再び」という副詞に強調マーカーのついた否定文を、「一生行かない」と訳したのは翻訳者の工夫であった。ただし、「また」は使えない。一度行って二度目に「また行く」と言えるように、「また行かない」は、一度行かなくて、二度目も行かない意味になる。この例文の意味で言うとしたら「また行くことはありません」とでもするところである。「また」のスキープの範囲が「行く」という動詞までだからである。副詞「もう」は、否定を伴って、同じことをこれ以上繰り返したくない気持ちを表し、もう二度とは行かない、という意味の、それ自体強調された言い方でもある。

- (5)    මේ       පැත්තෙන්       යන       වදුරෙකුට  
          mee     pætte-n       ya-nə       wadureku-tə  
          [this   way-ABL       go-NPT.AP]   monkey-DAT  
          翻訳原文：近くを通った一匹の猿が、  
          正文    ：近くを通りかかった一匹の猿が、

(3)の例にあった複合動詞と同様に、「通りかかる」は一種のアスペクト的意味を持ち、「通る」、つまり起点から着点まで通り抜けるという動作は完了しない。ちょうどその場所を通るというニュアンスがあり、おいしい種の焼ける匂いを感じた猿がその場に足をとめた様子を描写している。シンハラ語の原文で単純動詞が「猿」を修飾しているからといって日本語でも単純動詞を用いてしまうと、途中で足を止める描写を欠き、通り過ぎてしまってから匂いを感じたと解釈される恐れもある。また、すでにみたようにシンハラ語の知覚者が与格であるのに対し、日本語の動詞「感じる」が知覚者として主格を支配するのは翻訳原文のとおりである。

- (6)    බිත්ති       වලට       මිනේ       කරන       ඉති       කපාගෙන  
          එන්නට  
          bitti-     wələ-tə   oone       kərə-nə ini   kapaa-genə   e-ntə  
          [wall-   PL-DAT   need       do-NPT.AP]   wood     cut-PP       come-  
 INF  
          直訳        ：壁に必要となる枝を切って来るために  
          翻訳原文：木の枝を取るために

修正文 : 木の枝を手に入れるために

この例のような修正は、語の辞書的意味の比較によって語彙選択の問題として扱われるのが通常であるが、ここでは語の使用環境という点に注目して、その文法的な特徴をとらえたい。

シンハラ語には非定型の動詞の形態が数多く存在し、接続形態として意味をもっている<sup>6</sup>。この例での *e-ntə* は、*e-nnə-tə* の縮約された口語形式であると考えられ、動詞の体言化された形に与格の接辞が付いたもの<sup>7</sup>であると分析される。与格が移動の着点を表し、動作のゴール、目的、意図の意味に展開するのは通言語的によく見られることで、ラテン語で *dativus finalis* と呼ばれる。ここでも目的を表す副詞句となっている。そのような副詞句の中にあれば、意図性が高く、積極的な働きかけを示す動詞が使用されるべきであろう。「手に入れる」という動詞は、取ったら離さない、自分のものにする、といった意味で適切である。日本語では意図的で制御できるかどうかで目的節の接辞が異なり、「ように」vs.「ために」で区別する。ここでは意図性のある「ために」と動詞の整合性も高い。「取る」という動詞は汎用性の高い基礎的な語であるが、その多義性ゆえに、必ずしも「手に入れる」のような積極的な意味をもつわけではない。「取る」は「手に取る」ことを一時的に行う場合にも使える。日本人がテーブルに一つ残ったお菓子里に手が届かないので「あのお菓子を取ってください」を *take* (「取る」) で訳して隣席の人に言ったら、そのお菓子はその人に食べられてしまったという笑い話のゆえんである。

(7) කිසිම කෙනෙකුට ගෙට එන්ට දෙන්න එපා  
*kisi-mə kene-ku-tə ge-tə e-ntə de-ntə epaa*  
 NEG-EM person-INDF-DAT home-DAT come-INF give-INF NEG  
 翻訳原文: 誰も家に入ってこないようにしなさい。

修正文 : 誰も家に入れてはいけません。

シンハラ語の命令文は動詞の不定形で表す<sup>8</sup>ことができる。それに否定辞のついた文を訳したのが翻訳原文である。しかし、この日本語の文は、指示を与える表現としてはかなり間接的である。誰かが入ってくるといことがないようになんらかの対応をしなさい、といった程度の指示であり、努力して指示に従えなくても許容するという解釈さえ成り立つ。シンハラ語に許可を表す補助動詞として授与動詞が用いられていることが影響した可能性もある。しかし文のタイプとしては命令文である。シンハラ語は多くの極性表現を持ち、願望（この例での *epaa*）、必要、可能など、それぞれを表すモーダルな否定辞があり、それらは命令文とともに使用される。否定の命令文、すなわち禁止を表す文として、義務のモダリティ表現で訳出したのが修正文である。

(8) කුණාටුවක් එන ලකුණක් තියෙනවා

<sup>6</sup> 日本語でも同様に多くの非定型動詞の接続形態があり、従来の記述においては、*gerund*, *participle*, *infinitive*, *converb* など、研究者によってさまざまな用語が混交している。

<sup>7</sup> Gaiger (1938)、Chandralal (2010:203) による。

<sup>8</sup> この形式には地域差があり、*-ntə*、*-nnə*、*-ndə* の異形態が知られている(Chandralal 2010:255)。

kunaṭuwa-k e-nə lakunu-t tiyenəwa  
storm-INDF come-NPT.AP signs-too EXST

翻訳原文：台風が近づいてくるように思われる。

修正文：台風が近づいているかのように思われる。

シンハラ語で「台風が来る兆候もある」と表現されているが、lakunu という名詞は、今見えている兆候を証拠として指し、ここでは様態から判断する証拠性 (evidentiality) の表現となっている。ここでの文脈は、ポルトガル人が何隻もの大きい船で上陸した時の様子であり、海が荒く風が強いことを台風が近づいてくるようにと比喻で表している。実際に台風が来るわけではなく、実現しないことの表現として、修正文では、疑問を表す終助詞「か」を入れている。「まるで」「あたかも」のような非現実を表す副詞と共起しやすいのは、この形式である。

一方、シンハラ語でそのような区別をする際には、(f) のような文も可能であろう。「まるで～のようだ」と、シンハラ語においても(非)現実性の高さによって区別できることがわかる。ここでは、日本語話者がそのようなシンハラ語における違いを知らないとしても、前後の文脈から物語性を高めるために表現を修正したのだと思われる。

(f) හරියට කුණාටුවක් එනවා වගේ.  
hariyətə kunaṭuwa-k e-nəwa wage  
as.if storm-INDF come-IND look.like  
まるで台風が近づいてくるかのようだ。

#### 4. まとめ

シンハラ語文学が日本語に翻訳されたものはこれまでもいくつか存在するが、翻訳を対象とした研究、とくに両言語の構造や類義表現の対照研究がほとんどない中で、本稿では、シンハラ語の日本語訳が母語話者に不自然と感じられ、修正を提供された事例の観察と分析を行った。これらの例においては、翻訳によって与える印象の違いの大きさが、文学翻訳として一層際立っていた。分析結果のまとめは以下のとおりである。

形式的に同じ表現であっても、個別言語によって多義性の存在すること(例1)あるいは別の形で区別の存在すること(例8)を明らかにした。そのうえで、翻訳者はより適格な選択肢をとるべきであることを示した。日本語の複合動詞の理解については(例3と例5)、両例ともアスペクト表現の違いが顕著となった。そのほか、強意や否定では語彙の用法が変わること(例4)、単文の単位だけでなく、複文や談話の構造にまで注目すべきこと(例2)を明らかにした。また、翻訳における語彙の選択については、語彙論のレベルで語られることが多いが、ここでは語彙の選択がその文全体からきまるものであり、節や副詞句の意味的特徴、動作主の意志も考慮して決めるべきであることを示した(例6)。以上のように本稿では、不自然と言われた理由の解明や、文法的な説明も行いつつ、翻訳への応用のために可能な限り問題点の一般化をめざした。

全般的には、日本人の修正によって表現がより適格になり、物語のドラマ性が増した感がある。ことばのもつ小さなニュアンスの違いに注意し、適切に選ぶことが、物語



を生き生きと描写することになった。このことは文学翻訳において重要であり、本稿ではそれを言語の対照の観点から分析的に検証することで示すことができた。

なお、本論に挙げた以外にも、語の使用についての翻訳修正の提供を受けた。「びっくりする」 vs. 「驚く」、「家が焼けた」 vs. 「家が燃えた」、「不思議に思う」 vs. 「奇妙に思う」、など、主に、語彙的意味の類似性によるものであった。類義語の扱いや弁別方法についての議論は別の機会に譲る。

今回は、シンハラ語話者の産出例として一人の例を挙げたに過ぎない。シンハラ人としての日本語の産出にどのような特徴があるのか、克服すべき課題はどのようなところにあるのか、それをより精緻に明らかにするには、研究対象を広げて量的な研究も必要であることは言うまでもない。今後の課題とする。

## 5. グロス

ABL	ablative	奪格
AP	adjective participle	名詞修飾形
DAT	dative	与格
EM	emphatic	強調
EXST	existence	存在動詞
FOC	focus	焦点形語尾
GEN	genitive	属格
INDF	indefinite	不特定
INF	infinitive	不定形語尾
INVOL	involitive	非意図形
LOC	locative	場所格
NEG	negation	否定
NPT	non-past	非過去
PL	plural	複数
POT	potential	可能
PP	participle perfect	過去分詞
PST	past	過去

## 6. 謝辞

翻訳原文の不自然な日本語を指摘してくださった柴田泰孝氏・柴田かすみ氏、現時点で出版されているシンハラ語・日本語の翻訳についての情報を教えていただいたシンハラ語専門家クマーラシンハ・クラティラカ氏に感謝申し上げます。本論文における誤り、あるいは偽りの記述は、いずれも著者の責任です。

## 7. 参考文献

Amarasinghe, A.P.R. (2021). Issues confronted by Noguchi Tadashi in translating culture specific terms in

- Sinhalese novel “Viragaya” into Japanese. *Proceedings of the 11<sup>th</sup> Annual Research Session of the Sabaragamuwa University of Sri Lanka*, 58.
- Chandralal, D. (2010). *Sinhala*. John Benjamins.
- Dayarathne, P.N.N.D. (2016). A Linguistic Study on the Japanese Translation of “Viragaya”. *Proceedings of the Second International Conference on Linguistics in Sri Lanka ICLSL 2016*, 33.
- Dayarathne, P.N.N.D. (2015). The influence of culture on literary translation of Japanese Language into Sinhala. *Proceedings of the International Conference on the Humanities 2015: New Dynamics, Directions and Divergences ICH 2015*, 43.
- Ford, M. (1983). A method for obtaining measures of local parsing complexity throughout sentences. *Journal Of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 22, 203-218.
- Gair, J. W., & Paolillo, J. (1997). *Sinhala*. Lincom Europa.
- Gaiger, W. (1938). *A Grammar of the Sinhalese Language*. The Royal Asiatic Society Ceylon Branch.
- Lehmann, C. (2004). *Interlinear morphemic glossing*. In Booij, G. & Lehmann, C. & Mugdan, J. & Skopeteas, S. *Morphologie. Ein internationales Handbuch zur Flexion und Wortbildung. 2. Halbband*. W. de Gruyter. (pp 1834-1857).
- Mohotti, J.E., Shibata, Y., & Shibata, K. (2017). *Sri Lankan Folktales スリランカの昔話*. The Aruna Printers, Author Publication.
- Rathnayake, D. (2015). Error analysis on Japanese - Sinhala translations. *Proceedings of the First International Conference on Linguistics in Sri Lanka, ICLSL 2015*, 73.
- Ueno, M., & Garnsey, S. M. (2008). An ERP study of the processing of subject and object relative clauses in Japanese. *Language and Cognitive Processes*, 23. (pp. 646-688).

Weerasiri, P. R. (2013). *A Study of Literary Translation; with special reference to Japanese translations of*

*Viragaya and Tunmanhandiya*. (BA Dissertation, Sabaragamuwa University of Sri Lanka).

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房